

春燈

4月号

April 2012



主宰の句

安立公彦

今年また妻と二人の豆を撒く

地震の地に続く総の地春寒し

白魚のまこと小さき瞳と会ひぬ

松おほき葛飾みちの遅日かな

幸ひの言触れなるや春の虹



成瀬櫻桃子の句

しだれざくら好漢佇つとしだれたり

『成瀬櫻桃子集』昭和五十二年

西行ゆかりの地で、能「小塩」の小塩山の麓。正しくは勝持寺だが、境内に桜が多いこの花の寺での作とのこと。静かに目を閉じれば、会津に建立された先生の句碑〈天高しピサの斜塔とさざえ堂〉の側に植えられた美しい枝垂桜が思い出される。先生は枝垂桜がお好きだったに違いない。またこの句の「好漢」こそ、そこに佇まれた先生ご自身のお姿と思わずにはいられない。

吉澤恵美子

成瀬櫻桃子の句

水温む思ひ出よきことのみ残る

『成瀬櫻桃子俳句選集』平成十五年

長女の美奈子さんを亡くされてから先生はめつきり衰え、三年もたたず後を追った。満七十九歳だった。松崎鉄之介氏は、「茨の道の一生」と評された。両親の離別に始まり、肺浸潤に苦闘し、障害の娘と生きながらひたすら俳句を追求し、しかし、温顔を絶やすことはなかった。そして最後にこんな静かな句を残された。いまま分が先生の満年齢に達し、感慨ひとしおのものがある。

松本俊介

燈下集



○ 佐藤信子

天平の塔の裳階や初雀

書初の紙をはみ出す夢一字

楮や父の世遠き硯箱

椀種の結び三つ葉や小正月

みささぎの堀の水輪やかいつぶり

○ 本多游子

杖の歩の中途休止や寒鴉

ストープに枕ぬくめて眠りけり

墓地抜けて出逢ひし沼や春浅し

風光るとほくなるほど雲ばかり

ぶらんこの筑波を蹴つて止まりけり

○ 山内四郎

冬枯の桜の木々のたたずまひ

寒烏ふんはりと地に降り立ちぬ

三日月は月の横顔寒さうな

知らぬ人ばかり寒さに列車待つ

床の間の独歩の軸や明の春

○ 植田利一

着ぶくれてベレー被りて沈黙す

寒牡丹見たしと想ふ見にゆかず

年の豆数ふるすべなきこの夕べ (友逝く)

やうやくに芽吹きし辛夷の高さかな

吉野雛つぶら瞳のゆる愛し

まゆ玉の枝垂れて高き志

締め易き形見の帯や笹子鳴く

着ぶくれて世間いささか狭めけり

何の彼と言ふても夫婦鬼やらひ

どことなく弾む雨音春や立つ

○ 矢口笑子

大空へ音の明るき初電車

雲ひくく重なり合うて山眠る

凍て付きし滝の奥より水の音

ほろほると木よりこぼれて初雀

白障子日向の匂ひ残しをり

○ 赤羽陽子

○ 都丸美陽子

佳きことのみ母へ告げたる初便り

臘梅の香に魅せらるる曲り角

大寒や水の音なき雑木山

難聴てふあらたなる古い月冴ゆる

日の差して来し文机の梅匂ふ

○ 松山三千江

羽子つきの子に手加減をされてをり

夢二の女春着纏うて愁ひ顔

三日はやトーストパンを焦がしけり

時計屋のひとり商ふちやんちやんこ

骨董店のビスクドールや日脚伸ぶ

○ 加藤千春

熱海ざくら一期一会のまざまざと

寒紅や言うていいこと悪いこと

隣家より人の声漏る寒の入

しあはせは回り来るもの福寿草

水車小屋ありし堤や露の臺

○ 中澤弘

林道の曲がり尽して山眠る

初薬師帰る昼餉の八宝菜

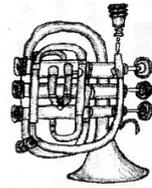
母と子の競ふ射的や初閨魔

初大師護摩焚く堂のいきざれ

狛犬の座して幾年節分会

当月集

安立 公彦選



○ 篠原幸子

後ろ千両せめてと願ふ初鏡

大服や何はなくとも日の恵み

炊飯器の合図高らか今朝の春

七草や指先ほどの幸を摘む

寒明くるやり直したき基本の基

○ 齋藤晴夫

玉砂利の万の韻や初詣

手水舎の水音に明け初詣

朝御饌の神橋渡る初霞

強霜の隈なく護る神の苑

紺碧の空をまづ祝ぎ初神楽

○ 西岡啓子

故郷の大きな空や冬の星

瀬戸内のけふもしづかに寒に入る

盛りあがる山の話や新年会

紅き実のあまた残りて日脚伸ぶ

ふりむかば雪女かも夜の道

○ 川崎真樹子

手話の手のひらひらと春迎へけり

婚姻届済ます二人に春時雨

残雪にはちみつ色の夕日かな

細結びほどくるやうに雪解川

梅日和万太郎似の古書店主

○ 大文字孝一

狐火や塩ひと振りの隠し味

大皿の五爪の竜や淑気満つ

一願を絵馬に託して寒の梅

寒月に孤高の空の広ごれり

寒晴の空からつばの広さかな

春燈の句

安立 公彦選

野水仙海のつぶやき聞いてをり

宮城 西川 春子

半島をへめぐる旅や椿東風

一椀の緑息づく七日粥

ホームより父の崩し字寒見舞

弾初の帯ゆるやかに締めにつり

神奈川 浅木 ノエ

母の咳つづく客問や夜の底

寒月や泣きたきときは鍋磨き

爛熱く生き方下手を諾へり

灰色の大大幕や冬の空

京都 平田 榮子

丈ながき茎のひともと春の薔薇

さざなみのきらめき湖上春立てり

釣舟のあまた繋かれ湖余寒

寒風の真青なる空綿毛飛ぶ

千葉 吉村さよ子

言つてに一輪添ふや春星忌

舞落つる塔の雪塊あさぎ空

夕風に洩るる一声寒鴉

風呂吹の手捻り椀にをさまりぬ

宮崎 永井 恵子

木の葉髪忘るるといふ加護のあり

襟巻に触るる媼の手のぬくみ

鴨翔つや思はぬ羽音高みより

角巻の隠し徹せぬ齡かな

東京 大森 道生

指揉みてより大寒のピアニスト

身の縮み上がる寒九の外廁

寒見舞よこして彼奴黄泉の旅

一畳庵とや季寄せ針箱福寿草

埼玉 茂木 なつ

朝粥やいのち養ふ寒卵

二十日正月孫を土産の里帰り

沈丁花恋知り初めし色香かな



余言

安立公彦

正月のかほして並ぶ雀かな

三上 程子

「初雀」の目出たさは例えようもない。人の住む所にはどこにも居て、可憐な鳴き声とその姿は私たちの生活の一部ともなっている。

その初雀が三、四羽庭に舞い下りた。縁先からそれを見る作者。雀に表情があるかと聞かれると返事に困るが、それらの雀はよく見るとたしかに「正月のかほ」をしている。この表現を借りると、中には「したり顔」の雀もいよう。そういう連想も出来るところに、この句の独創性がある。その独創性は正統な表現を得て一句の奥行を深めている。

生くるとは死を待つ事かしばれ雪

滝沢 幸助

「しばれ」は冬の厳しい寒気。作者の住む会津にあつてはこの「しばれ雪」は日常的な言葉だろう。それを受けての「生くるとは死を待つ事か」は、一転重いテーマだ。

そのテーマは、人生を考へるとき、私たち高齢者にとって思考の幾つかの選択肢の一つとなる。ことに作者にあつては、会津、戊辰戦争、飯盛山という歴史上の事実が存在する。この史実は当地に住む人には今も生きていたのではなからうか。私はこの句を見ながら、今述べた事と共に、今期直木賞受賞作、『蝸ノ記』を思い出していた。

春宵のどこからとなく人出で来

武田 巨子

春の季語はどれも愉しい。ことに「春の宵」は、「春宵一刻値千金」と蘇軾が詠ったように、趣の深さに人懐かしさの伴うまこと値千金のひとつときである。

この句の「どこからとなく人出で来」は、まさにその趣をみごとに言い止めている。「どこからとなく」が茫漠としているように、春宵という季語をしなやかに支え、一句をゆるぎないものとしている。

をんな正月アイン濃く人に会ふ 平野加代子

「女正月」、いい季語だ。季語は季節の移ろいを示す言葉であるとともに、季節の移ろいに伴う生活の情緒を一句にもたらすものである。季語を選ぶということは、その句の

俳句としての存立を左右することと言っても良い。

この句、「アイライン濃く」というめりはりの利いた中七が絶妙だ。この中七が「をんな正月」という季語の持つ伝統と生活のあり様に、新しい趣を添えている。

春近し癒ゆる体を愛ほしむ 棗 怜子

月初めになると燈下集を中心に投句用紙が届く。そこには正にその人の悲喜こもごもの人生が表現されている。この句の作者の場合もその一つだ。同時発表の句に「ペースメーカーに救はれし身や寒鴉」の句がある。後日聞いたことだが、昨年暮れに心臓に不具合が生じ入院、即手術となったとのこと。辛い術後の経過は順調と聞く。その安らぎの思いが「春近し」に良く表現されている。

人に言へぬ墓に手向くる帰り花 北岸 邸子

俳句には一篇の私小説に匹敵する内容を持つ句がある。この句などその一つと言えよう。俗な例えになるが、少なくとも短篇小説のヒントとなり得る句だ。

鈴木真砂女先生に、へかくれ喪にあやめは花を落しけり（さる人の死を悼む）という句がある。真砂女には真砂女の、邸子には邸子の人生がある。それは勿論生きとし生ける人全てに通うもの。その人生はしかし、俳句として形を成すとき、一篇の詩として昇華する。この句を見る人はそれぞれの持つ

「人生」に照らして鑑賞するだろう。そこに文芸としての俳句の存在価値がある。付け加えるならば、「帰り花」の扱ひもみごとだ。

後ろ千両せめてと願ふ初鏡 篠原 幸子

「後ろ千両」は後ろ姿が美しいこと。「初鏡」とともに和服が常だった頃からの言葉だろう。この句新年大会で入選句に頂いた。「せめてと願ふ」という中七に気持を打たれた。慎ましやかな女性らしい句だ。

同時発表の句に、へ七草や指先ほどの幸を摘む」という句がある。この「指先ほどの」も同じだ。作者は控え目という作法が美德とされていた時代を良く知る人、と思う。現代はそれを振り捨てている人が多い。しかし慎ましさは時として岩をも動かす力となる。

手話の手のひらひらと春迎へけり 川崎真樹子

「手話」という伝達手段は、現代にあつては社会生活の一つの方法となっている。「ひらひら」は擬声語。へ鳥わたるこきこきこきと缶切れば 不死男」の句は有名だ。

この句の手話の二人は若い女性。「ひらひらと」が上五下五双方にかかり、俗に墮ちず、しかも「手話の手」をごく自然に「春迎へけり」に導いている。「けり」の切り字も一句を良く収斂する。